

令和6年1月25日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 石原 明子

1973年 3月 19日生

学位論文題目

水俣のもやい直しの研究—修復的正義の歴史社会学

(A Study of Minamata's Moyai-Naoshi : Historical Sociology of Its Restorative Justice Efforts)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

石原明子氏の論文「水俣のもやい直しの研究—修復的正義の歴史社会学」は、水俣病の発生地・熊本県水俣市において、地域住民間の複雑な加害被害関係を修復し人間関係を再構築する試み(もやい直し)を分析対象とする論文である。地域社会の分断状況のなかでの人間関係の修復と地域社会再生の軌跡を歴史的に明らかにするとともに、紛争解決学の知見に基づき、修復的正義の視点からのもやい直しの意義づけを試みるものである。

2. 本論文の構成

本論文は全体で10章から構成されているが、第1章から第3章は、もやい直しの歴史社会学的分析及び紛争解決学による理論的考察の前提となる議論を展開する。すなわち、第1章「はじめに」で石原氏の問題関心や基本用語の定義等を明示し、第2章「先行研究の検討」では先行研究の学説史的整理とそこから導き出される課題を示し、第3章「研究の目的と方法」では歴史社会学及び紛争解決研究の方法論的な検討を行っている。

以上の前提的な議論を踏まえ、第4章から第8章において、水俣におけるもやい直しについての歴史的経緯の記述がなされている。第4章「もやい直し前史—水俣地域住民

の分断と対立の歴史的経緯」は、水俣病発生以前からの同地の歴史を概観したうえで、「チッソを救うか」「患者を救うか」という二項対立的な地域の分断構造の形成過程が明らかにされている。第5章「もやい直しの萌芽期—1980年代を中心に」では、分断状況のなかでほとんど接触がなかった地域住民（患者リーダー、議員、行政職員、支援団体関係者など）の間に接触が生れ、その中からもやい直しにつながる気づきや新たな価値観の発見があったことが示されている。また、政治的社会的な立場の違いだけでなく、「山」と「街」と「海」という居住地域がもつ意味の重要性に触れられている。第6章「もやい直しの急速発進期—環境創造みなまた推進事業の前半期（1990年度から1994年1月まで）」は、熊本県による「環境創造みなまた推進事業」をめぐる動きに焦点を当て、「人間関係再構築」と「水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」という2つの考え方がもやい直しの重要な柱となり、対立関係にあったリーダー間の人間関係再構築が進んでいったことが明らかにされている。

続く第7章は、もやい直しのキーパーソンの一人である吉井正澄市長の下での取り組みが取り上げられる。吉井市政発足直後の市長による患者団体代表の訪問、水俣病犠牲者慰霊式での「公式謝罪」、水俣病資料館の語り部制度の創設や火の祭りなど、この時期に行われた多くの取り組みが、第6章までの記述で取り上げた人物の心の動きや行動と関連付けて描かれている。第8章「もやい直しのゆくえ—吉井市長退任から現在までの水俣」では、吉井市長退任後行政レベルではもやい直しへの取り組みは後退傾向にある一方、産業廃棄物処分場建設阻止運動や患者及び患者家族の二世帯による新たな動きなど、もやい直しの取り組みが地域社会に根をおろしていることが述べられている。同時に、石原氏の参与観察も踏まえながら、水俣病に向き合うことを拒否する住民に蓄む深い傷つきという、従来のもやい直しの視野には入っていない問題があることが指摘されている。

以上のように、石原氏は水俣病をめぐる地域社会に生じた分断とそこからの回復の歴史を、多くの関係者に対するインタビューを用いたオーラルヒストリーの手法も積極的に用いながら生き生きと描いている。この歴史叙述に基づいて、第9章「考察」においては、歴史社会学と紛争解決学のそれぞれの観点からの考察を試みている。歴史社会学的には、もやい直しの形成において、人間の新たな「出会い」とそこから生まれる関係構築や、様々な契機により生まれた「水俣病に向き合い、負の経験を未来に生かす」という考えの広まりが大きな意味をもったこと、また、90年代に本格化したもやい直しを考えるうえで前史としての80年代が重要な意味をもつことが指摘されている。紛争解決学の観点からは、石原氏は、水俣の地域内の分断・対立は、「傷ついたコミュニティ」、「複合的で包含的な住民間の加害被害関係」、「関係者の力の非対称・構造的暴

力」の三つの性質を有するとし、紛争解決学における既存の理論モデルと照らし合わせる作業を行い、内戦地のコミュニティ再生モデルが適用可能であると指摘している。さらに、石原氏は、リーダーと住民との関係、本音のぶつけ合いによるコミュニケーション、接触と信頼醸成の関係、招待的赦し、第三者の役割、ニーズへの傾聴、といったもやい直しの歴史過程における重要な要素について、紛争解決理論からの説明を試みている。

以上のような歴史叙述と歴史社会学及び紛争解決学両面からの理論的な考察を踏まえて、第10章「結論」で総括的な議論を行っている。本論文の歴史叙述が明らかにしたように、患者リーダー、行政職員、支援運動関係者等、様々な立場の人びとの間で、接触とその中で気づきが積み重ねられ、修復的正義へと結びつく考え方が形成されていき、それは、1990年代の吉井市政時代にピークに達した。そのことが持つ歴史的な意義を確認しつつも石原氏は、住民のなかには現在もお水俣病と距離を置き患者への差別・中傷を行う住民もいることを指摘する。しかし、実はそうした住民自身にも水俣住民あるいは水俣出身であるということで受けた差別による傷つきがあるのであり、この視点も組み込んだ形でもやい直しのさらなる展開の必要性を指摘する。

3. 本論文の評価

1) 評価されるべき点

水俣市におけるもやい直しの取り組みに焦点をあてた本論文は、患者支援かチッソ支援かという二項対立的な枠組みを前提とした従来の水俣病関連の研究に対して、新たな視点に立つ研究の意義とその可能性を示している。また、水俣病をめぐる地域社会内に生じた深刻な分断状況から人間関係の修復と地域再生に向かう歴史的な経緯を丹念に描き出しており、さらに紛争解決学の知見を積極的に用いてもやい直しが有する修復的正義としての意義を説得的に提示している。論文では、文字資料だけではなく、もやい直しに関わった様々な立場の人物へのインタビューを積極的に用いており、水俣に暮らす人びとの複雑な心のあり様を具体的に解き明かしつつ、異なる立場の人びとの接触を媒介として、紆余曲折を辿りながらももやい直しへの動きが立ち上がっていく経緯が生き生きと描かれている。また、石原氏がこれまで蓄積してきた紛争解決学の視点からの分析も、非常に明快かつ説得的であり、本研究が水俣を題材とした事例研究であるだけでなく、他の紛争事例の研究に対しても学術的な知見を提供し得ている点も評価できる。

2) 問題点

本論文では、内戦地を対象とした紛争解決学の理論的枠組みの水俣の事例への適用可能性が論じられているが、そのため水俣の事例が有する固有性が十分に論じられていない。内戦地と水俣の事例の共通性だけでなく、相違点を明確化する必要がある。これと関連して、論文中で言及されている「山」「街」「海」という水俣地域における居住空間が有する特徴が、歴史分析のなかで十分に生かされていない等、水俣地域の個性が十分に描き切れていない。また、もやい直しという水俣地域で用いられている言葉について、一般的な概念と関連付けた考察と説明が必要である。

4. 総合評価

本論文では、関連する学説史の整理と石原氏の論点提示、水俣病による地域社会の分断とそこからの再生についての歴史叙述、紛争解決学の知見も交えたもやい直しの歴史的意義の検討のそれぞれにおいて、論理的な叙述により明快な説明がなされている。歴史分析と紛争解決学との接合のあり方や水俣地域の個性の描き方等についての問題を指摘できるものの、水俣のもやい直しの取り組みについて、多くの関連文献と資料にあたり、また関係者からのインタビュー調査も積極的に活用し、もやい直しを軸とした地域再生に向けた人びとの試行錯誤や心の動きが生き生きと描かれていること、そうした歴史分析を紛争解決学の理論枠組みに関連付けてもやい直しが有する歴史的意義を提示したことは評価に値する。本論文は、水俣病に関する従来の研究が見落としてきた領域に光を当てるとともに、紛争に苦しむ人びとや地域に対して参照となる知見を提示し得ている点で事例研究を超えた一般性を有しており、博士学位論文としての水準に達していると評価できる。

授与する博士学位 學術

論文審査結果 合格

審査委員

主査 (氏名) 坪井 一 圓

副査 (氏名) 城戸 秀之

副査 (氏名) 竹岡 健一

副査 (氏名) 西村 明